

---

# たとえば、水色の空が青色の空に変わった日

沙希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

たとえば、水色の空が青色の空に変わった日

### 【Nコード】

N0253S

### 【作者名】

沙希

### 【あらすじ】

高校を卒業し、大学入学を目前に控えた春休み。杏奈は幼馴染の春哉の家に行った。小さな、ささやかな春哉に対する願いを胸に抱いて。そして春哉もまた、杏奈への想いを抱いていた。（本作品は以前、別サイトで完結済み作品として発表していたものの、転載になります）

「ねえ、春哉」

「なんだよ？」

杏奈の呼びかけに対する春哉の返答はいい加減なものだった。証拠に彼は寝そべったソファから顔一つ動かさない。視線はさつきから読んでいる雑誌にむけられたままだ。

けれど今日の杏奈はこれしきのことまでへこたれるわけにはいかなかった。

気づいてもらうのだ。

自分の小さなくつかの変化に。

高校時代同じ学校に通い女子寮と男子寮という違いはあるものの、同じように寮生活をしていた二人はこの春めでたく高校を卒業した。大学入学までの春休み、多くの寮生と同じく二人は実家へ帰ってきている。

そして幼馴染であり実家をご近所である杏奈と春哉は高校時代と何ら変わらず、毎日のように一緒にいた。多くは二人の共通の友人たちと一緒にいることが多かったが今日は二人きりで、春哉の家にいる。

この年代の男女が二人つきりとくれば何かありそうなものだが、何も無いのが杏奈と春哉だった。

そう、杏奈と春哉の関係は『友達以上恋人未満』。彼らの友人たちは二人を恋人同士だと認識しているし、杏奈も心のそこでそういう未来を思い描いてしまう。

だが二人は互いに自分の関係を『腐れ縁の友人』だと認識していた。

もしかしたら、春哉も腐れ縁の友人を脱することを望んでいてくれているかもしれない。もちろん良い意味で。

けれど今の関係はとても安定していて、居心地がいい。

高校時代、髪の毛をロングで通していた杏奈は髪をばつさり切った。大人のお姉さんをこれからは目指そうと、大好きな水色の洋服しか着ない自分が、紺に近い青色の落ち着いた色合いの洋服を着た。

春哉の実家に住む彼の祖母は、遊びに来た杏奈を見るとすぐさまその変化に気づいてくれた。

自分の孫の成長を喜ぶかのように優しい顔で、大人っぽくなったと杏奈をほめた。

春哉の祖母がほめてくれたのはもちろん嬉しいが、自分は春哉に気づいてもらいたいのだ。

別に春哉に綺麗だとか、かわいいとか、そんな言葉は望んでいない。

いや、100パーセント期待していないと言ったら嘘になる。けれどまず間違いなく、春哉はそんなことは言わない。

だいたいそんな言葉を言われた日には、大爆笑間違いなしだ。嬉しいと思う前に、きつと春哉の頭を心配してしまう。

自分の小さな変化に気づいてほしい。

本当にささやかな願いだ。

春哉が自分に關心を持つてくれる。子供っぽいとはわかっているけれど、それは杏奈を幸福にする。

「呼びかけといて、なんだよ？」

相変わらずソファに寝そべり雑誌を読んだままではあったけれど、春哉は杏奈に会話の続きを促した。用件を早く言え。そう言っている口調だった。

やっぱり春哉はなんにも気づいていない。

杏奈は軽く溜息を吐いた。

そして、幼馴染である自分に今更關心など持たない春哉を少し恨む。

「なんでもないよ」

「んだよ、それ？」

機嫌を損ねたのか、春哉はぶすつとした顔をする。

春哉、わたしがそういう顔をしたいよ……。

そんな眩きを内心もらしてしまつ杏奈の気持ちなど、ただの幼馴染の春哉にはわからないのだろう。

ふと、春哉は表情を改めた。

「なあ、杏奈」

「なに？」

じつと春哉は杏奈を見る。

杏奈も春哉を見返した。

そこにいるのは、いつもと変わらぬ顔立ちだけは上玉の分類に入る幼馴染。

春哉の視線の意図がわからず、杏奈は首をかしげる。

「お前、ニブイな」

さきほどの杏奈が漏らした溜息とは違つ、呆れたような溜息だった。

どうして自分がそう言われなければならないのか、さっぱり分からない。だが杏奈からしてみれば、自分の変化に気づいてくれない春哉の方が断然ニブイ。

雑誌を適当に放り投げ、春哉は突然立ち上った。

「ちょっと、どっか行くの?」

おもわず杏奈は慌てた。

この家は春哉の家なのだから、彼が出かけるといふならば自分は家に帰らなくてはいけない。

「お前も一緒に行くんだよ」

端正な顔に付属する口はさも当然のようにそう言いきる。

さつきまでは杏奈がソファに寝そべる春哉を下にして見ていたのに、彼がたち上がったために今度は立場が逆転する。

「へっ?」

春哉の顔を見上げ、思わずばかんとする。

「散歩」

そう言いながら春哉はもう玄関の方へ歩き出している。

どうしようかと迷っていると、杏奈は春哉に名を呼ばれた。

はっと春哉を見ると、杏奈が数歩前に踏み出せば届くであろう距離に大きな手が指し伸ばされている。

二人の間にある数歩の距離。

自分から歩み寄って、差し伸ばされた手を握るのは恥ずかしい。でも、意地悪天邪鬼の春哉は普通の顔で自分を待っている。自分から動かなければ、負けたような気がする。

杏奈は大きく一步を踏み出し、差し出された手をはにかみながら握り返した。

\*\*\*\*\*

「ねえ、春哉」  
「なんだよ？」

杏奈は何かを期待するきらきらとした目で春哉を見ている。

正直、春哉はそんな表情をする杏奈が苦手だった。彼女のかわいらしさに赤面してしまう表情を隠すのは、なかなか厳しい。

だからつい素っ気なくなってしまう。どう接すればいいのか、わ



からなくなる。

昔はそんなことはなかった。

自分の幼馴染がそれなりの綺麗な分類に属する女だという認識はあっても、こんなわけの分からない感情は持っていなかった。

だから春哉はいい加減な返答をすることで、杏奈からこの感情を隠そうとした。まぎれもない照れ隠しだ。

春哉は杏奈に見えないように溜息を一つ吐く。

日々そんな努力を重ねている自分のことなど、杏奈は知らないのだろう。

今日の杏奈はいつもと違った。

よく見なくても彼女の髪が大胆にカットされていることも、大人っぽい青色の服を着ていることもすぐに気がついた。

その姿を一目見た瞬間、その髪に触れ、新しい服がよく似合っていると、言いたかった。

けれど『ただの腐れ縁』である自分は、杏奈にそんなことは言えない。だいたい髪に触れるなんて行為をしたら、変態になってしまう。

二人の関係は『友達以上恋人未満』。

彼らの親しい友人たちは二人をなぜか『恋人同士』だと認識している。

春哉も心のそこでそういう関係を望んでいたが、二人は互いに自分たちを『腐れ縁の友人』だと認識している。

それでいいのだと春哉は思う。  
自ら今の関係を壊すことはない、と。

今日の杏奈はずっと、なにかもの言いたげな視線を自分に送っている。

杏奈が言いたいことを、春哉はわかっていた。

いつもとちよつと違う自分に何か感想を求めているのだろう。

だが春哉は気づいていることさえ、隠してしまう。

子供っぽいということはわかつているが、恥ずかしいのだ。

だから、もうただひたすら誤魔化すしかない。

杏奈は春哉の顔を見下ろし、春哉が杏奈を見上げる。

春哉がソファに寝そべっているからどうしてもそういう形になる。

春哉はポーカークフェイスを装い、用件を早く言え、という言葉を表情に出す。

杏奈の変化には気づいていないふりをする。

彼女は軽く溜息を吐いた。

何も言わない春哉に対し、怒ったのだろうか。

「なんでもないよ」

「んだよ、それ？」

やはり杏奈は機嫌を損ねたのだろう。

声に刺がある。

杏奈は怒り出すとしばらくは口をきいてくれなくなる。  
杏奈に特別な想いを抱いている春哉としては、それは辛い。  
どうにかして、ご機嫌を直さなくてはいけない。

「なあ、杏奈」

「なに？」

じつと杏奈は春哉を見る。

春哉も杏奈を見返した。

そこにいるのは、いつもと変わらぬ顔立ちも性格も上玉の分類に入る幼馴染。

春哉の意図が分からない杏奈は首をかしげる。

その動作が春哉の心をくすぐる。

どうしたって、  
欲しくなる。

「お前、ニブイな」

自分が杏奈の変化に実は気づいていることも、自分が杏奈の一作にいちいち気を取られていることも、自分が杏奈に抱いている感情も 察してほしいのにしてくれない。

頭は悪くないくせに、どうしてこっちの方面ではちゃんと働いてくれないのか。

おもわず、哀しい溜息を春哉は漏らしてしまつた。  
雑誌を適当に放り投げ、春哉は突然立ち上つた。

「ちょっと、どっか行くの？」

慌てたように杏奈は自分を見上げた。

春哉の方がずっと背が高いから、今度はそういう形になる。

「お前も行くんだよ」

彼女は『二人で一緒』が好きだから。

「ご機嫌を直すには『二人で一緒』じゃなくてはならない。

「へっ？」

杏奈間拔けな声を出す。

春哉からしてみればそれも愛しい要因にしかない。

重症だと、自分が一番よくわかっている。

「散歩」

そう言って春哉は玄関の方へ歩き出す。

しかし杏奈の動き出す気配がしない。

春哉は後を振返った。

少し勇気が必要で、ポーカーフェイスを保つのが大変だったけれど、

杏奈の名を呼び、彼女に向けて手を差し伸べる。

杏奈との間にある数歩の距離は春哉の未熟さ。

それは春哉自身も自覚している。  
自分から数歩を踏み出し、強引に杏奈の手を握ることが出来ない。  
それをするにはまだ、勇気が足りない。  
だからどうか、この数歩の距離を杏奈に縮めてほしい。

その願いが届いたのか、杏奈は大きく一步を踏み出し、春哉が差し出す手を照れながらも握り返した。

\*\*\*\*\*

杏奈の家を出て、春哉は空を見上げた。  
空に広がるのは一面の青。

今朝、幼馴染の少女を家に迎えに行く途中、何気なく空を見上げた。その時の空は一言で言うならば、『水色』だった。

けれど今の空の色を一言で言い表すならば、ずっとずっと深みを含みました『青色』。

水色と青色は似たような色だ。けれどどうしてこんなにも、与える印象が違うのだろうか。

小さな違いであろうと、小さな変化であろうと、その差は大きい。杏奈にしてもそうだ。服装一つでどうしてあんなにも変わるのか。いつもとちょっと身なりが違うだけだ。なのに、自分の心は騒いでいる。

杏奈は隣を歩く春哉の顔を見た。

春哉はついこの間から比べて背が伸びた気がする。顔立ちがずつとずつと、精悍さまりました。もうすぐ大学生だというのに男はいつまで成長期でいるのか。

高校に入学してすぐ、背が伸びなくなってしまった杏奈としてはちょっと男がずるい気がする。

春哉は変わった。小さな変化の積み重ねではあるが、確実に大人の男性へと変わっている。

だから、自分の心は騒いでいる。

前よりもずつとずつと騒いでいる。

小さな変化が与える影響はこつも大きい。

「ねえ、大学の入学式は一緒に行こうね」

「ああ。今思えばよくお前、大学受かったよな」

「それは、春哉も一緒!!」

「俺は合格間違いなし、って模試の結果からも先生からも言われてたけど。お前はギリギリだっただろ」

「うるさいな！受かったんだから、いいじゃない！！」

「まあ、とにかくまた…………… 一緒だな」

「うん。一緒だね」

お互いにつないでいた手をさらにぎゅっと握り合う。

あまりに自然に手をつないでいる二人。

手をつなぎあえることが、どれだけすごいことなのか二人は気づいていない。二人をよく知る親友たちが見たら、呆れた笑いがおこるところだ。

けれど無理をする必要なんてない。

二人には二人のペースがある。

それに手をつなぎあえる幸福に気づくのは、そう遠くはない。

小さな変化が与える影響はとても大きくて、そのたびに戸惑ってきた。

でもいつだってわたしたちは一緒に、それだけは変わらない。

変わりたくはない。

どんなに大きな変化が訪れても、この手を離さなくていいように。

二人が互いの想いを知るのはまだ先。

想いを知る頃にはきっと、水色の空が青色の空に変わるような小さな動きを積み重ねて、二人は大きく成長している。

二人が二人であるかぎり。

つながっている想いはぼやけたまま、確かに存在していた。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0253s/>

---

たとえば、水色の空が青色の空に変わった日

2011年10月8日02時28分発行